

Title	<書評>牧田久美著『キモノ図案からプリントデザインへ : GHQの繊維産業復興政策』
Author(s)	並木, 誠士
Citation	デザイン理論. 2021, 78, p. 46-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83335
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【書 評】

牧田久美著『キモノ図案からプリントデザインへ
GHQ の繊維産業復興政策』

株式会社思文閣出版 2021年2月18日発行 総345頁

並木 誠士 京都工芸繊維大学

概要

本書は、1945年から1955年という敗戦直後のきわめて限定された時期を対象として、日本の繊維産業が戦争という混乱と混沌の時期を経た「戦後」にどのように再出発を遂げたかを論じるものであり、この時期における日本の繊維産業の対外的状況と国内の様相を、あらたに見出した資料類を駆使して明らかにしている。

本書の特質の第一点は、副題にもあるように、GHQの政策と繊維産業とのかかわりが明らかになったことであり、輸出や流通に関して日ごとに変化する国内外の状況とそれへのGHQの対応が詳細に記されている。敗戦直後の混乱期の服飾をめぐる状況については、一般に和装から洋装へというおおきな変化としては理解されているものの、その実態については、かならずしも明らかになっているとはいえなかった。先行研究を踏まえて、本書がデザインという切り口からこの時期の様相を明らかにしたことの功績は大きい。さらに、本書では、一貫してデザインの問題を論じてはいるが、その際に、英米の輸出政策や対アジア貿易といったグローバルな視点を一方で設定し、他方で、キモノ図案から洋装におけるプリントデザインへという観点から、作り手、市場、海外からの評価といった視点を設けて論じている。このように、多角的な視点からデザインの問題を明らかにしている点が第二の特質といえるだろう。

構成

本書は二部構成になる。

「第一部 占領政策の中で — GHQ 日本占領

関係資料から見る —」は「第一章 占領初期の繊維動向 — GHQ のシルク政策 —」「第二章 GHQ の綿加工貿易政策」「第三章 日本綿産業の国際市場進出と諸問題」という構成で、GHQ 日本占領関係資料を丁寧に読み解きながら繊維産業の動向を詳述する。とくに戦後間もない時期の、生糸、絹織物、そして、綿製品へと変化する輸出品目のあり方に GHQ の政策が深く関わっていた点、そして、GHQ が繊維産業を平和産業と考えて積極的に支援している様相を明らかにしていることが、ここでの最大の成果である。

1946年3月に「世界的に通用する染織図案の作成と染織製品の輸出振興」を目的として日本染織図案家連盟が設置された経緯や『染織図案サンプルブック』作成の背景、1950年5月の英米合同繊維グループの訪日をめぐる駆け引き、1950年にイギリスとのあいだに起こった意匠盗用問題と1955年3月の日本繊維意匠センターの設立など、ひとつひとつのトピックスが詳細であり、そのステップを踏みながら、わが国でデザインの重要性が認識されるようになる過程がよくわかる構成になっている。GHQ の関与が経済的側面にとどまらず、図案（デザイン）に及んでいるという指摘と時々刻々と変化する様相が、それぞれの立場での微妙な揺れの振幅まで、新出資料を駆使して克明に語られる。GHQ とデザインとの密接な結びつきという意外さが前半の魅力である。ほんの10年ほどのなかにさまざまな出来事が凝縮されているので、その記述は良質のドキュメンタリーでありながら同時にドラマティックですらある。あえて言えば、トピックスごとに年表をつけてもらえれば

より理解しやすかった。

「第二部 国内繊維産業の復興と戦後プリントデザインの創成 — 染織図案家の動向を中心に —」は、「第四章 戦後プリントデザインの芽生え」「第五章 彷徨する伝統的美意識 — キモノ図案からプリントデザインへの模索 —」「第六章 先駆的プリント服地図案家の誕生」「第七章 躍動する京都プリント — 新しいプリントデザインの創成 —」という構成で、戦後の日本国内でのプリントデザインの誕生から流行までを語る。章立てでわかるように、ここでは、プリントデザイン先進地であった京都が主要な舞台になっている。

明治から大正期の京都の捺染産業の先進的意義や1960年代を中心とするアフリカプリントへの傾注については、「ここにもあった匠の技 — 機械捺染 —」（2010年）、「京都からアフリカへ — 大同マルタコレクションにみる1960年代京都の捺染産業」（2013年）など京都工芸繊維大学美術工芸資料館でもたびたび展覧会を実施して、資料の公開につとめてきたが、本書で対象としているのは、ちょうどその狭間ともいえる敗戦からの復興期の様相である。とくに1949年3月の第1回京都染織見本市の開催とその直後の作り手たちの模索の様子、同年に結成された図案団体「エース」の活動などに焦点を絞って論じている。『染織ライフ』『装苑』など当時の雑誌、業界紙などを参照して、豊富な図版を紹介し、関係者の声を拾いあげながら、この短期間の、キモノ図案からプリントデザインへと急速に変化する様を浮かびあがらせる。

伝統的なキモノの図案から洋風のデザインに展開してゆく過程は、図案家の試行錯誤もあり、また、海外からの影響もあり、興味が尽きない。図案からデザイン、和装から洋装、服飾からファッションという変様の時期にあって、和洋折衷、マチス・ピカソ風の抽象表現の受容、古代文様や琳派への揺戻などが見本市の資料や服飾雑誌を丹念に追ってゆくことで示される。これまで歴史的に位置づけられていなかった図案家ひとりひと

りの活動の実態が見えてくる点でも貴重な論考である。自明のこととして明確に語られてこなかった和装から洋装への展開、和模様から新しいプリントデザイン誕生への道筋が、キモノ図案家の試行錯誤とともに本書によりはじめて明らかにされたといってもよいだろう。

意義

本書では、以上のように国内外の資料を詳細に分析することにより、繊維産業が戦後の混乱から立ち直り、さらに国の基幹産業として最重要の位置を占めるにいたるまでの状況を詳述している。短い期間の出来事をさまざまな角度から論じているために、全体像を把握するのに戸惑うこともあり、そのためにも年表は不可欠であろう。とはいえ、メモ書きのような資料も含めた関連アーカイブから立ち上がる歴史の様相は、アーカイブを活用した歴史研究の有効性を明快に示している。

最後に、上記のような詳細な分析を経ているからこそ歴史の大きな流れが浮かびあがっている点も指摘しておく必要があるだろう。

本書では、明治・大正期の日本の図案集の類が欧米でコレクションされ、それが欧米におけるデザイン、さらには抽象絵画の成立にも影響を与えたこと、そして、その成果のひとつであるピカソやマチスの絵画が日本において展覧会というかたちで公開されることにより同時期のプリントデザインに影響を与えたというある種の循環的現象が指摘されている。このことは、そのまま、江戸時代までの日本の浮世絵が欧米のアールヌーヴォーに影響を与え、そのアールヌーヴォーを20世紀初頭に浅井忠などが日本の美術工芸界に輸入した様相と重ねて考えることができる。このような、美術・デザインの歴史のグローバルな流れが明確になっている点も本書の功績だろう。

以上のように本書は、戦後間もない時期の日本の染織産業と染織デザインの状況を知るための貴重な情報に溢れた好著といえることができる。